清流

題字：芳野充

令和元年12月30日
第36号

発行所　加来不動産㈱
発行者　加来　寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

非をみとめ、謝る

いつの時代もそうだったのでしょうか。政界では税金をつかって、もはや目的がぼやけてしまったような招宴の経緯を弁明する政治家。スポーツ業界では、選手とのあつれきが起きているのに、他人事で自分の主張を押し通そうとする役員幹部。世間では、高速道路で車をあおり、人身にかかわる重大な事故をおこしたにも関わらず、悪びれもせず取材に応じる加害者。あげればキリがありませんが、ここ最近のニュースを目にしながら、何とも後味のわるい気持ちになります。

「謙虚さがなくなる兆候」の9番目には、「理論派になりだす（屁理屈を言う）」とあります。「理論派」とは、きちんと筋道を立て事例を出し、「例えば～であるから～という結論になる」などと説明する手法。「屁理屈」とは、手順を踏まないで無理やり強引に自分勝手な理屈をつけること。理論派も行きすぎればもはや、屁理屈にしか聞こえません。

屁理屈な人の特徴として、次の8つのことがあげられると、あるインターネットの記事を目にしました。「皮肉屋」「自分の非を認めない」「人の話を聞かない」「謝らない」「プライドが高い」「わがまま」「自己防衛意識がつよい」「正当化したがる」。一つ一つの項目についての内容は、紙面上ひかえますが、8つの特徴を読みながら、冒頭であげた様々なニュースを思い返し、「なるほど。謙虚さがなくなるとは、こういうことか」と納得しました。

とは言え、わたしも偉そうなことを言える立場ではありません。わたしが、さもできているようなことを口にしていると、妻や子どもたちから虚をつかれ、反撃されることがあります。そのようなとき、とっさに出てくるのは、「ごめんなさい」ではなく、「いや、違うんよ」から始まる「屁理屈」です。改めて、屁理屈な人の特徴を自分に当てはめてみると、他人をとやかく言える資格はないな、と反省いたします。

「修身　斉家　治国　平天下」《「礼記」大学より》という言葉があります。「天下を治めるには、まずは自分の行いを正しくし、次に家庭をととのえ、次に国家を治め、そして天下を平和にすべきである」という意味ですが、「さいきんの政治家は…」などとぼやく前に、わたし自身が妻や子どもたちから尊敬されるよう、自己を磨いていくこと。それには、誤りを指摘されたときには、いさぎよく非をみとめ、謝ることを心がけたいと思います。

加来　寛